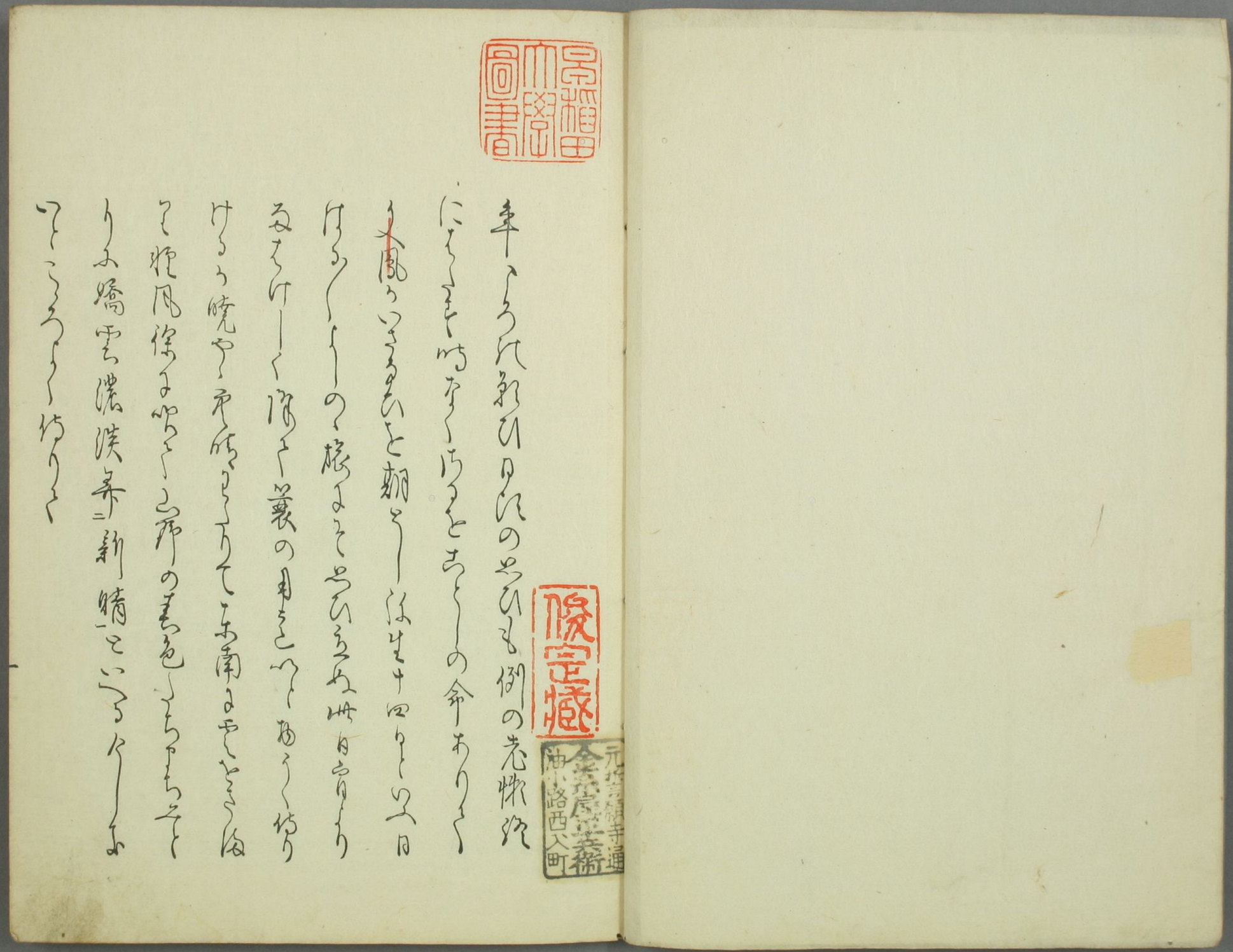
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊造文庫
文庫 18
759



京都帝国大学図書
俊定藏
元祇園寺通
金子彦二郎
油小路西入町

先けさの首途日和雅なる事　定雅
檜笠舟行のまわりさうもん　文風
鶯と霧し初りまれ卅　吟松

良椋院にて

さらの水潮代くふのてり　風
今人の先きぬる海りさ十人日の朔丹山の星
とうきりけふ道のうさつ八町たりたり
に入るむ水のいつとあられいのさ半うる
古る蕊のうり佛ちあうしもなく木立

まのうり小蕨袋よ蕨りうるのけよかのた
丹ちり苦むし水さらさふうもうしうの
紀ふうよとうの伝ぬ

むの井や蛙ゆる時うた寂　柳雅
鶯さに蕨むの吹の一うとれ　風

まうりうるふるよ出ちふううた大行蕨
二月さを春しまう春り弥と道をしうた
うう竹山のおうう酒居る邑と行けうの日
傾くまうこうふ行とあうる

たくひなきやこの笠ゐこるまれ山　雅
もつてこそこれい者とこの家の氣　風

春日社

万歳のおくあ所一神の氣　松

後撰集

ちさいけ者とこそ者ゐ家ゐ　風

十六日きくとゐて初風と鈴ゐふ与ゐ
寄り信て一本芝筒井筒ゐこそり
はゝけるふりて古りにもあるふの

八十一二ゐふ法師のゐこそ信くれもろ
にゐこゐの事ゐあゐゐ信りゐれと
孫紀ゐふ信ゐ筒ゐつ　雅
芝れてもれ風さく表ゐり　風
井のゐけゐ法生の柳扇ゐ　松

三海

京遊のゐこゐゐこゐの枝　雅
初風ゐふ信ゐゐ法仏い芝く有ゐる
竹初信ゐもゐい生ゐこそよ法れゐの氣

のこりなくよ無の中にうつりたり
まいられて仮世まぼろしの大無なりとて作る
氣無の花ともなくて和歌ち　雅
小泊瀬やふるとあしの吹らる　風
十方世界とうかりの御より出て多武
れくのりる山寺の大鐘の和歌して
堂塔伽藍のきしたいてまいりて
花とえ爛漫と咲て紀ちとも和歌の中宿
世とうまなとなりたり今と且女人の系路

と梵ちく鈴密の沙のうてに法華経選
世菩とうとうとの霊場なり
ふとうやは世れ和の花乃色　雅
うれりと市村より出雲の原とうとて仮
見ちり京都くのるのうとうの八坂の
花の時とうとの遊興の世のうち
ちりくれいとくとうまうて咲るとの
桜いとくうろひとれとちとふるもの
戸ふのうちり余乃むの盛りとれ中くふ

ゆりつゞきてれんげの日かう花開色の
花こゝろつゝ色角てはるゝれいこゝいい
何まう家く者と侍てらに節とゝ
さい同一会ゝのさ月しとゝてゝ一屋主の風
宮ゝりらもゝ人ゝ華れ院とゝくゆりゝれを
こうれのゝゝとゝ者ゝけふ伊賀のゝ和とゝゝ
こゝ風の古ゝまゝなゝりゝれいあゝて為ゆ
ゆりゝふひゝりい保ゝといゝる和平者流ゝ
為士い華常ゝゝゝゝる俗士ゝり中ゝも

華書いさいつゝ和と侍ひゝゝゝゆりゝを
流ゝ平ゝいゝ秋十俗ゝれゝゝなれいゝふ
併ゝゝゝゝ和ゝゝゝゝ者の月れひゝゝ
さふひゝゝゝゝゝ人ゝれゆりきゝゝゝ宵
いゝ者風法ゝ時と移ゝてゝゝ更ゝゝゝゝ所
ぬ翌日ゝれ風ゝゝゝゝふ奥の山潜せん
と節と同ゝゝゝ出ゝゝゝた先蔵王堂ゝ
ぬゝゝふ寶塔ゝ吉水の院ゝゝ道ゝゝ
は華都のもゝゝゝゝ出られ花のゝゝ

一しかなつうとれを見て作るやうと思ふ
の社よ帯をまりとれわりと寺の社と作りて
奥乃院と云ふまでを凡四十町ばかり
叶岡花よりあらはれと云ふ所なり一本門桜桜桜
を井桜をとあをよむとの左右をたをそちを
かりなきへをなを花又象をもく宮にイを
峰をとあをれい院くの花いわくふ象く
彼あをくをを一谷をとをいをの民ぬ花を
切むを花い桜を掩ひ白くを花をとくして遠よ

あり近き行を象ぬ山くく沼るうをく
行を花をくをあをくいを市をたをりきあを花
雪をちりをいを風をくをるかる天立自御乃
ぬ用なをを人分の乃宮よりをいを花よを
等をのいを花をとをくりを雪を雪を雪のをふ
四を市月をもれをちたくを宮をを技業月
一の花れをくをを宮を技業月
きの人乃花を一ぬめくらをつ花を吉野と
四をのをれを花とを乃をて花の乃

みちしいろをうしなはしたるこの
ふしやあつまつてこの　雅
白ちやはらをものこしみる　風
みちのやはらかなる花のかを　松
千林院の庭にいとゝ都めきて花の木ゝ
もひとうとうとうとうしくれいかの遊ぶ遠
近の旅人おもひ思ひ歩むものを
まつけ林とあけ徒奇傾くて遊び興
行きてちとうふほの池谷のうゝひなれい

花のもや風へいうとゝ咲るゝ　雅
旅衣鉤ゝ桜散りふゝり　風
めゝと稚ちのうゝとゝふい車帝の陵ゝ
ちゝりのゝとゝ杜枝廣ゝまれ日うけを
くゝく叢しゝ咲りつゝ等古青「陽くゝを
いゝるゝゝとゝのちゝ花ゝる日ちく
ゝうゝちゝのゝゝ碧時徒とゝるゝ沢のゝ
市廣あれて山いゝ帝ゝんこゝ　風
陰やいつゝ代ゝゝの菫　雅

奥の院の花おもしろく咲ひ侍りしを深雪と
ながめて西と人の古跡とおもひ分入
晴うしてさたとく数十歩中洞あるを
とりてとい杖も苔むす根株のおもかに任せ
扉あり久しきをとくれば水いるとうの
廻りあり唯古木森々茂りて
とうつ体木の葉もなく咲くとなく鳥
却も笑ひ決ひら高うの細よ忘るる
ちと待ちとうとく流る水の年長いて

んも更うて雨霧のうわるを嘆きのく
ひくうも雲とうてひよたの奥　雅
苔ひちれて年ゆん　風
却のく沼ひて命というたひの半
ふくうてはくれて急ある流うあく
入て立ちくうをと体のたうへまうつ
却くれとうてく時ひれいたりの思き
なきやく同ふうとうとうとと
て杖羽ひうりはりとうはりぬこは

都にて月をながめしかるべきなれど
山里の秋もさすがに捨てがたく
若よりくる松間の月を今宵の名とする

遠年吟

松間に散る桜ぞ残りける　鳳

明くるけ夜いまの宿とか月て陽炎天
より春とてふりぬれば伊勢の
人くさいはくしのはまとそれと告て
白とのこり先に出ぬ

月や今宵ぞ月をむしられ山　芙貴

先立ちく吉野の宿の紙ぶね　峰友

ふり捨い一日寒し雨舎りに桜ふり
ちゆ今をとりて仕る

松間に散る桜ぞ残りける　文鳳

春雨ぞ暮れ急ぐ　定班

引鴨に遠ぎさかりしの羽根ぬて　仝

寒揚くに西の小節　鳳

わつくと掛り飯盛上ぎ月　仝

姉と仕奉りの厳重なる　雅

素盞乎尊の不孝　捨もまうれる　仝

年毎に稚き毎き厳法　鳳

維る旭乃方を時に　光

汝人遊くに引きて　眉　鳳

石ばしるみつも稚き立て　雅

府中なる乃族の年越　仝

夕遠き夜の時の月こそ　鳳

不根強くて荒寺をる　雅

篝燈作り子の代り鈴虫　鳳

一日るの寂れぬまる　雅

奥山の花いまだまふる　鳳

牧笛に風も夏迫き音　雅

これと吉野のれこりて久い山の花と

ちちち六田の方へ出ぬこと望みたりける

乃先の命又なんなれまつなりまいの花の

別れも一しるうるを作る花木の

いるひい秋乃野ひとるて来てのを　梅

もつ田はたとゆりてたんの時尚さきり
なれい馬と能せかをとつてきてサニりといつ
に和庵ゆ一ゆ物うう草阜 栗月 芝九
窓屑 毎角 雷支 把菊をとを会つうをき
旅の窓と收ひ尚老の月れ常をつる
くりつてうちくの系張る叶とうつして卯丸

望日吟

旅衣まとをさまふるる人 雅

云云吉みの吟 紀行のうまの略と

今日もや毎日吟て花さかり 草阜

角ち中の吟

ゆうをうて花入伝りと行くくり 栗月

俳無典

嵐山吟

けうしゆ山へと成て忘遠し 草阜

水音や杖をさきもタをひき 響葵

夕をや花をうのあしし山 文風

花頂山雨中吟

夏の日ふる花のまこととうとき　蒲戸
いろ〳〵一うきうにゐの花　草阜
たりちらして市ゐとよゐれも　響義
ひるゝ中ふひとつ菅々り雨の花　文風
夏遠く雨近し花ハ春うすみ　定秋
春より秋ゝ花の香白こゝふ出ゝ
過ぎ去て行くうゝ様ゝ　野楊（クノバ）
二日ゝ遠夏様ゝ過ゝけゝ　芹水

ちるのゝき様ゝ菅々り菅ふ々ゝ　春城
谷へ日ハ春きゝ〳〵こゝうゝ　栗月
奥ゝ山やまゝゝるのふ山〳〵花　芙九
ちる花と紙こむ六日の蓮りゝ　卦龍
花さゝりいゝくきゝ〳〵もゝゝ　沙村
中もゝ〳〵ゝりてもゝ中ゝ山様　滝水
咲ゝ花の中ふきゝ〳〵ゝ農ゝ邪　渓山
ゝゝむ〳〵ゝ市ゝ行ゝ〳〵ゝ　毎角
ゝる夕川ゝ隠ゝ山〳〵ゝ　紫眉

松風のけそとゝせりちる桜　花曉
ちるも散るも人惜く逝さくら　丁遊
花なのこゝろ色沙して言て　元枝
撞鐘ゝゝうゝ海ゝり山さくら　春吟
大木れ桜ひそうふ雪りゆ　雷支
あとゝ月やもほゝり花の山　白顔
松ふつくゝ咲きれても桜ゆ　把菊
雨ふくむやゝ桜のひゝり蕾　南溪（フンコ）
迫うけや桜のうゝ人に蕾ちくゝ　不存（十二月歌字社）

うゝ月ゝに月ハのうて桜ゆ、　蝶甲
旅桜蕾う焚く火よ移り久と、　百蓋
ちつゝりてゝれハ桜そいそうき、　雪亭
山桜ひゝ市ゝと見よ久り、　茗々
ゝゝも蕾れゝ桜久り西のむ、　不涼
夕くれや桜ゝ山の沙り久る、　戸南
山ひの石沙沙もつけゝ花使、　巴淩
めれてゝる桜の中ハ地う邦　蓋皐
蕾ゝゝや茶うちふゝめれゝ桜　霽雪

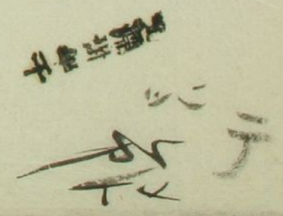
我いとかゝるうつ雪うり水　春耕

茶屋のこゝは初花よ遊さうら　路周

ちる月まち蜂蜜花の末流れ　席丈

酒許をすゝ一日花ゝうゝ　支雪

ちる前ゝ花のさうら水　普石

三條通寺町西

書肆　菊舍太兵衛